



ベビードール

恋を叶えてくれる香りとして、女の子の間ではあまりに有名なその香水が、愛美ほど似合う人はいない、と翠は思う。

恋多き女とは、彼女のことを表現するためにあるような言葉だ。

いつでもエネルギーに満ちあふれている愛美は、四六時中誰かに夢中になっていて、その恋を手に入れるためなら他のどんな犠牲もいとわない。

もっとも高校生の私たちに、恋の代わりに失うものなんてそう多くはないけれど。

可愛い子はいいなあ、なんてそんな愛美を見ていると私は思ってしまう。

もちろん自分は自分だと、思っているし受け入れてもいる。実際、私は自分が嫌いではないし、変わりたいという願望も強くない。

それでも、彼女を見ていると、私はこうはなれないなあ、つくづく感じてしまうのだ。

それは、儚い諦めに近い憧れのようなもの。

彼女はお人形さんみたいに華奢で可愛らしい。それなのに生気に満ちあふれてて、肌なんかいつもつるつるしていてゆで卵かマシュマロみたいだ。

だから彼女の肌に少しでも触れてみたいと、授業中でさえ男の子たちは彼女に見とれている。

誰かを好きになると、やっぱりいつでも綺麗でいたいって思うじゃない、と彼女は言う。だから私はいつでも気を抜きたくないのよ、とも。

それは私だって一緒だ。好きな人には、可愛いと思われたいし、綺麗だとも言われたい。

でも、彼女の場合、その「気を抜かない期間」が年柄年中だから私は感嘆してしまう。

私や他の女の子が、失恋した後に数ヶ月もしくは半年以上かけて傷を癒している間、愛美は失恋した次の日にはもう他の男の子と並んで歩いている。そして、昨日まで隣にいた男の子のことなんてもう知らないわ、と言いたげに楽しそうに笑っているのだから、あっぱれだとしか言いようがない。

そういうとき、やはり私は彼女にはなれないわ、と思う。

恋多き女とは、なろうと思ってなれるものではない。

やはり、その呼び名は、彼女が一番相応しい。

だから、彼女がある日の放課後、誰もいない教室でひとり泣いているのを目撃してしまった時、私は心底驚いてしまった。

どうしたの、とおそろおそろ問う私に、彼女は涙声で言う。

つきあってきた先輩に、ふられた、と。

大好きで大好きで仕方なかったの、と彼女は言った。

彼を失いたくない、どうしよう、と彼女は声を震わせた。

彼女が机につっぷして泣き出すから、彼女の長い髪がざらりと揺れた。

愛美が、泣いている、と私は不謹慎なくらい新鮮な気持ちを覚えていた。

失恋なんて、私より数倍慣れているはずの彼女。恋の終わりなんて、今までにいくつも経験してきただろう彼女。

いつも男の子とお別れした後だって、けろっとして笑ってるじゃない。

どうして今回はそんなに悲しむの？
そんなに特別な人だったの？

恋愛の成就がうたわれてるその甘い香りは、今の彼女には不似合いで、ひどく皮肉に思われた。私はただ彼女のそばにいることしかできなくて、自分の無力さを痛いくらいに感じてる。ぽん、ぽんと彼女の震える肩をたたく自分の指の一定のリズムに、なぜか自分が救われるような気がした。

次の日、教室に現れた愛美を見るなり、私はあっけにとられるよりなかった。いつもより丁寧に結われた髪と、ほんのりとのせられた薄いお化粧品、そしてまばゆいくらいの満面の笑顔。普段よりも元気そうで、一層やる気に満ちた顔してる。今日は学校に出てこないかもしれない、もし来たとしても、どんよりとしているだろうから私が一日彼女と一緒にいよう、という私の固い決意は無用のものとなった。いつまでもしけた顔してらんないわよ、と彼女は笑う。はぁ・・・と私はきつねにつままれた気持ちで空返事。昨日の彼女の悲壮な表情、脳裏に焼き付いている。あれが私の見間違えのはずはないのに、どうしたことか、この晴れ晴れとした笑顔。いつものとおり、もう既に新しい男の存在があるということかしら。

今日の髪かわいいじゃーん、と友人に声をかけられて、調子にのってポーズをとる彼女を、理解しがたいものを見るような目つきで見ていたとき、彼女はふいに私のところに来て囁いた。

昨日はありがと。助かった。
ちょっと今回は時間かかるかもだけど、
翠には、次の恋が見つかったら教えるわ。

それだけ言って、彼女はクラスメイトの輪の中に戻ってく。
昨日彼氏にふられちゃってさ、と明るく笑い飛ばす彼女はさすがだ。
全然傷ついてないふりをするのも、完璧。

恋多き女とやらも、大変なんだなあ。
そう私は内心つぶやく。
おちおち失恋の余韻に浸ってもいられない。
昨日の涙、私に見られたのさえ彼女にとっては計算外だったのだろう。
やはり、私には真似できない。
どんなにお人形みたいに可愛い女の子だって、恋には頭を悩ませるのだなあ、と私は当たり前のことをしみじみと思ったりする。

先ほど彼女からほのかに香ったのは、昨日までと同じ、ベビードール。

いつか手に入れるその恋の成就を待って、彼女はいつでも準備万端だ。

ファーレンハイト

彼の体と、その匂い。

シーツの間で触れる彼の肌の感触と、火傷しそうに火照った彼の手。

それら全てと交錯したその香りを嗅ぐ度に、私は体を熱くする。

ファーレンハイト

眉を顰める彼のその顔が、私は大好き。

いかにも冷静さを欠いた、その荒い息遣いや漏れる声、それに混じる自分の名前を聞くのも好きだ。

彼の指が私の体のあちらこちらを探るとき、快感で我を忘れそうになるけれども、どこかで冷静に彼を観察するのを私はやめない。

だってそれが、彼が私のことだけを考え、私との行為にだけ夢中になっているとわかる、唯一の時間だから。

彼が、彼女のことを考えていないと感じられる、貴重な時間だから。

だから、私は見逃したくない、と思う。

その表情、声、手の動き、温度、匂い、その全て。

初めて彼が私を抱いたとき、それは彼がまだ彼女のことを想っているということを告げられた後だった。

彼女のことをまだ好きなのに私を抱こうとするなんて、と、拒否しようと思えばいくらでも出来たはずだった。だけど、私はしなかった。

今まで仲間の間でも、私に対しても、完璧な紳士だった彼が仮面をとった、そのことに私は喜んだ。

もちろん優しい人は好きだし、特別扱いされるのも大切にされるのも重要だけれど、優しさの裏にあるものを曝け出されたときに私は自分が女であることを感じる。

紳士的で、優しいだけの男なんていない。男が優しいのは下心があるからで、その下心を見せられたら、それがやっとな女の関わりと呼べる気がする。

相手の男が悪者に見えてきたとき。そのときが、その恋の本当の始まりだ。

いい声で、彼が呻くのが耳に届く。

彼の体はどんどん節度を失っていく。いつもの君の冷静さは一体どこへ？

でもその顔、もっと見せて。その声、もっと聞かせて。

君の喜ばせ方なら、私は知り尽くしているつもり。

現に、彼がこんな風に私の髪をつかむ時、それは彼が私の舌の動きに夢中になっていることを意味する。

快感に飲み込まれそうになりながらも、そのときの私の様子を目に焼き付けようとする彼の視線は熱い。いくら私が見ないでと言おうが、効き目はない。

でも本当に全てを焼き付けようとしているのは、私の方。

彼の冷静が戻ってくる前に。彼が平熱に戻る前に。私は刻み付けておこうとする。

今しか感じることの出来ない全てを、全身で。

吐息とともに私の名前が吐き出され、私はそれが近いことを知る。

彼の声が遠慮がちに私の許可を求めるけど、私は頷くことしか出来ない。

彼がずっと達することなく、このままだったらいいのになんて本心は告げることもなく。

今すぐにでも達しそうなときの彼のその全てが好き。

そして、そのすぐ直後に訪れる、全ての変化を私は憎む。

もう唇にキスは落とされないと、私を呼ぶ声に熱はこもらない。

「そろそろ帰るよ」

「うん」

しばしの静寂の後、私は上体を起こした。

全ては過ぎ去った。寂しさのあまり、私は安堵さえ抱く。

見送りすらしようとしない彼の後姿に目をやった後、私は玄関を出て、外で自分のカーディガンを羽織る。

ベッドで取り払われたそれからは、先ほどまで十分すぎるくらい刻み付けてきたはずの彼の香りが漂う。

いくら刻み付けても、足りない、と私は絶望的な気持ちで思う。

彼を喜ばせる方法なら、いくつも知っている。

でも、彼の体温を急激に上げることは出来ても、それを保つことは、私には出来ない。

「・・・もう恋しいよ」

思わず立ちすくみ、つぶやいてみても、その涙声は玄関の扉一枚に阻まれて、届くことはないのだった。

彼女のことを想うとき、彼の体温はどんな風に変化するのだろうか。

きっと、私のときと違って、その曲線は緩やかなものなんだろうな、と思った。

Crystal Scent

同じクラスの環くんは、私が密かに憧れる人だ。

私だけじゃなくて、彼に想いを寄せる子は多い。

格好よくて成績が常にトップなところなんかは、確かに、女子の注目を惹き付けてやまないし、その人気は学年を問わない。

だけど、私が彼に惹かれるのは、他の男の子たちが決して持ってない落ち着いた雰囲気だとか、思慮深さだとか、奥深い優しさを持っているところ。

好みの芸能人の話題に花を咲かせる他の男子生徒たちの輪に、決して入ることなく、教室の隅の席で文庫本を手にしてるようなところ。

そういう、誰ともつるもうとしないところを見ていると、手の届かないような、近づいてはいけないような高貴な存在に思えてくる。

だから他の女子も、きゃあきゃあ騒ぐだけで、実際に彼に対して積極的な行動をとる子は多くない。

そんな彼に、年上の恋人がいるということは、意外と知られていない。

彼が自分からそういう話をすることはないから、みんなが知らないのは自然なことかもしれない。

時々、恋人と一緒にいる環くんを街で目撃しちゃった子たちが、ショックのあまり尾ひれをつけて、あることないこと噂話にしてしまう以外は、私たちクラスメイトと隔たった距離を保つ彼の内面を垣間見ることはできないのだ。

でも、私はちょっとだけ、特別。

他のクラスメイトが見ることのできない彼の一面を、多少なりとも、見せてもらえている自負がある。

彼にしてみたら、不可抗力と言えるかもしれない。

あるいは、ちょっと不運だけれど、その代償に大きな幸せを感じてるから私の存在も気にならないと感じているのかも。

だって、私は迷惑になることはしてないつもり。彼が困るようなことはひとつも。

こうして、彼の恋人について噂が飛び交ってるのを耳にしたら、やんわりと否定してあげることだってしている。

もっとも、そんなこと彼は望んでいないか、もしくはどうでもいいことなんだろうけど。

環くんの大好きな彼女は、私たちの5つ年上。

ミーハーで落ち着きのない私なんかとは正反対の、品も色気も持ち合わせている大人の女性だ。

彼女と一緒にいるときの環くんを見るのは、ちょっとつらいけど、ちょっと幸せ。

彼って、本当に嬉しいときって、子供みたいに邪気のない笑顔で笑うから。

そういう表情を彼にさせてあげることのできる彼女を、私は、妹として、とても尊敬する。

彼とは一緒に教室で一日中過ごすわけだから、普段はお姉ちゃんより私の方が彼と過ごせる時間は長い。

だけど、そんなことで喜べるほど私は単純でもないし、無邪気でもない。

だって、私はよく目撃してしまうから。

彼は授業中なんかによく、制服の裾を自分の鼻に持っていく癖がある。

頬杖をつくようなさりげない仕草で、彼は自分の手首の香りを確かめる。

そうして、お姉ちゃんと手をつないだときに移ったのであろう残り香を、大切そうに吸い込んで、ちょっと切なそうな顔をするのだ。

誰も気づかないような、そんななんでもない彼の動作を、私のアンテナはいちいち拾い上げてしまう。

どうせ放課後になったら彼女に会いに家に来るくせに、と私はそういう彼を見て内心毒づく。

どうせすぐ会えるのに、昨日だって会ってたのに、そんなに会いたくて仕方ないって表情しなくたっていいじゃない。

そういう嫉妬がうずまいている私は、きつとこれっぽっちもいい香りはしていないだろう。

お姉ちゃんと一緒にいるときも、いないときも、私は数ミリさえもお姉ちゃんに対して優位に立てることがない。

「薫も恋くらいしてるんじゃないの？」

夕食の席で何気ない話をしていたら私に話題の矛先が向かった。

どういうわけか、今日は環くんは来ていない。

「17歳なんて、一番恋に現を抜かせる時なんじゃない？」

お姉ちゃんは、罪のない、綺麗な笑顔を浮かべて言う。

「冗談でしょ。お姉ちゃんの方がよっぽど私より恋に夢中になってる」

「・・・そうかしら」

私が口をとがらせて言うと、彼女は困ったような顔で柔らかく言った。その様子は、少し私の癪にさわる。

「あー、やになっちゃう。こんなに若いのにさ、楽しい恋のひとつもできないなんて」

すると、予想より厳しい反応が返った。

「楽しい恋？そんな贅沢言っちゃ駄目よ」

「贅沢？」

「恋の付属品は、悲しさであり切なさであり、胸の苦しきよ。決して楽しきなんかじゃないんだから」

彼女は、心なしか腹をたてたような口調で言う。

「そりゃ説得力に満ちたお言葉ですこと」

「もう、生意気ね」

あきれ果てた様子の彼女を知らん振りして、とっとと食事を終えると、皿を流し台に運んだ。

お風呂から出た後にふと目に入った鏡を見て、私はため息をついた。

お姉ちゃんみたいに、綺麗だったらいいのに。

私の方がちょこっとだけ胸は大きいけれど、彼女のほっそりとした脚線美は私にはないし、何よりお姉ちゃんの持つ色っぽさや気品は、どう私があがいてみたところで手にすることができるものではなかった。

あと5つ、年を重ねたところで、彼女のような大人の女性になれるとも期待できない。

私は途方もない気持ちで、鏡の前に置かれているお姉ちゃんの愛用の香水を手にとった。
円錐形の、シンプルなボトル。

余計な飾りも色もない、洗練された女のひとに許されるような香水だ。

一方の私は余計なものだらけ。持つべきでない嫉妬や、お世辞にも綺麗とは言えない感情が腹の中でうずまいていて、洗練されているとは程遠い。

何とはなしに、蓋を取って、自分のパジャマの袖口に吹きかけてみた。

そして、それを自分の鼻元に持っていってみる。

環くんがいつもしているのと同じように。

改めて嗅いでみると、媚のない、すっきりした香りだった。

余分な女らしさも強調しないから、男の人だって違和感なくつけられる香りだと思う。

セクシーさを押し付けるのではなく、もともと持っている女性らしい魅力を引き立てるような、控えめな表現の仕方がまさにお姉ちゃんらしい。

環くんは、いつもこの香りに包まれているんだ、と思うと悲しくなった。

お姉ちゃんと過ごせない時間には、離れていながらもこの香りを胸の奥まで吸い込んで、会いたい思いや、愛しさや、優しい気持ちに浸るのだろう。

蓋をして、元あったところに戻す。

敵わない、と思った。

わかっていたことだけど、こんな恋の香りに浸っている男の子を、可愛らしさや初々しさしか強調するものがない私が、振り向かせることができるわけがない。

その夜、お姉ちゃんの透明な香りに包まれながら見たのは、少しだけ大人な自分になって、大好きな人に笑いかけている自分の姿だった。

どんな香りを夢の中の私がまとっていたかは、残念ながら覚えていない。

次の日、私は上々な機嫌で登校した。

昇降口で上履きに履き替える環くんを見かけて、ますます嬉しくなって私は駆け寄った。

だけど、環くんの様子はどこかおかしくて、その予感はずっと私が側に寄って彼に軽く触れたときに顕著になった。

「おはよう、環くん」

彼は、はっとしたような瞳をこちらに向けて、私を拒むように体をよけた。

「・・・？」

顔がこわばって言葉を発することができない私に、彼は氷みtainな冷たい目を向けて、こう言った。

「どういうつもりだよ」

「え・・・？」

「それ、どういうつもりだよ」

私は混乱する頭の中で数秒思考をめぐらせた後、何かに思い当たって、自分の袖口を慌てて匂った。

一晩たって誰にもわからないだろうと思っていた、昨夜のお姉ちゃんの香水が、まだ私の手首

に残っているのだった。

「ごめん」

この香りは、環くんが大切に大切に思っているのを知っていた。

お姉ちゃんしか、つけてはいけないものだった。

即座に申し訳ない気持ちになったけれど、こんな表情の環くんはさすがの私も見たことが無くて。

案の定、周りの生徒たちも近寄りがたい様子で距離を保ったまま、こちらを見ていた。

私は、香りが人を傷つけることができるということを、このとき初めて知った。

人だかりに気づいた環くんは、ちっと舌打ちする。

「嫌がらせかよ」

立ちすくむ私に吐き捨てるみたいに言い残してその場を去っていく。

嫌がらせ・・・？

それは言いすぎではないか、と思った。

「ちょっと待ってよ」

環くんの背中に向かって、思わず叫んでいた。

「なんでそこまで言われなくちゃいけないのよ」

彼の足が、止まる。ゆっくりと振り向いたその顔は、まだ青い炎が燃えているみたいに、冷たくて、熱かった。

「そりゃね、わかってるよ、この香りは私がつけちゃいけないんだ、って。お姉ちゃんがつけるから環くんにとっては意味があって、大切に、愛しい香りなんだって。」

もう周りのざわめきなど耳に入っていなかった。

「だからって、そんな言い方ないじゃない。嫌がらせ？それはこっちの台詞よ！あんたら二人のために、私がどんだけ気持ちを押し殺してきたか知らないで。私の気持ちも知らないで！！」

環くんの表情からは、即座に炎が消えた。

戸惑いの色がどんどん強くなって・・・今は、申し訳ないって顔してる。

「私の気持ちになんかちっとも気づかないくせに・・・そんなこと言わないでよ！」

腹の底から吐き出すように叫んだら、息が上がるほど自分の感情が高ぶっていることに気がついた。

突然、周囲の様子が鮮やかに目に入ってくる。

「ごめん・・・、薫。悪かった」

環くんが近づいてきて、躊躇した手が私の頭を優しく撫でた。

謝られたかったんじゃない・・・。

そう心の底で思ったけど、もう言葉にはならなくて、ただ流れる涙を止めることもできずに立っていた。

彼は、始業のチャイムが鳴るのも構わずに私を撫でながら言葉を続ける。

「薫、ごめんな。俺・・・おまえに言われるまで、気づかなかった。鈍感でごめん」

私が泣き続ける間、環くんはずっと謝っている。

「それと・・・振られたのだって、おまえのせいでもなんでもないので・・・。あたってりして、ごめん」

その言葉に、涙が一瞬引っ込むかと思うほど驚いて、私は顔を上げた。

「ふ、振られた?!」

「なんだよ」

「誰が？」

「俺が」

「誰に?!」

「・・・他に誰がいるんだよ」

ため息をひとつ吐いて、困惑した顔してる。

私は事態が飲み込めなくて、ただ呆然とするしかなかった。

「聞いてなかったんだ？」

「・・・ちっとも」

ぶるぶると、必死で首を横に振った。

「じゃあ、わざとじゃなかったんだな」

そう言って、安心したように彼は笑うけど、私はまだまだ笑えない。

振られた、だって?! 環くんがお姉ちゃんと、別れたということ?

信じられなかった。どうして、と聞こうとして、その一言は飲み込んだ。

そんなの、環くんに聞いたって仕方がないことだった。

お姉ちゃんに聞いても、同様に、どうしようもないことなのだろう。

”楽しい恋?”

昨夜そう言ったときの、お姉ちゃんの少しぴりっとした様子を、私は思い出した。

決して楽しさなんかじゃないんだから、と彼女は言った。

当たり前だけど、あのときにはもう、彼女は環くんに告げていたはずだ。

あんなに楽しそうだったのに、どうして、と思った。

環くんに聞けない分、ずっと、心の中で、繰り返し繰り返し尋ねた。

どうして、お似合いに見える二人でも、うまくいかないの?

環くん、あんなに好きだったのに。

くやしかったけど、誰よりも憧れるカップルだったのに。

「薫」

脱力して床にしゃがみこんだ私に、呆れたように環くんは腰をかがめた。

「もう、授業だ。行こう」

「だって・・・だって」

「大丈夫。大丈夫だからさ、ほら」

そう言って、優しく手を貸してくれる。

彼が大丈夫なのか、何が大丈夫なのかよくわからなかったが、まるで私が失恋したのを環くんが慰めてくれているみたいで、ちょっと笑えた。

その日一日中、私たちが噂する声は途絶えなかった。

特に、いつも感情を見せない環くんがあんなふうに出しにすることは、女子生徒の間ではちょっとした衝撃だったらしい。

もちろん、私も含めてではあるけれど。

あんなふうに出した顔も、するんだなあ。

怒った顔、冷たくて、どうしようもなく怖かったなあ。

そうぼんやりした頭で考える。

やっぱり恋する気持ちは、人を変えるらしい。

帰宅するとお姉ちゃんはいつものように穏やかに笑っていて、そのなんでもないような様子には腹が立った。

これが大人の余裕ってやつなの？

だけど、浴室の棚から彼女の香水が消えているのを見つけて、私はさりげなく彼女に尋ねた。

「あれーお姉ちゃん、浴室にあった香水は？」

「あれは、またつける余裕ができるまで、おあずけ」

「・・・ふうん」

いつでも余裕綽綽に見えるお姉ちゃんにも、余裕が今はないと言う。

きっと、あの香りを嗅いだら、楽しかった思い出や愛しい気持ちが全部、一瞬にして蘇ってしまうんだろう。

きっと、私が今朝、環くんにしてしまったみたいに。

鋭いナイフで、心の奥の一番柔らかいところを、すばっと斬りつけてしまうのだろう。

「私も恋に現を抜かしてみようかな。楽しいことばかりではないみたいだけど」

冗談めかしてそう言うと、彼女はにっこりと笑った。

「人を好きになるのって、苦しいけど、素敵なものね」

きっとその笑顔の裏に、痛々しい思い、たくさん抱えてる。

だけど、そう言ったときのお姉ちゃんはいつもより、なお一層綺麗だった。

恋を見つける前に私は、自分の香りを見つけなくっちゃ、と心に決める。

背伸びをするんじゃなくて、誰かの真似でもなくて。

魅力を引き出してくれる、自分にぴったりの香りを見つけたら、もしかしたら

環くんがしていたように、私の香りを絶えず求めてくれる人が現れるかもしれない。